

光珠内季報 200 号発刊を迎えて

八坂通泰

光珠内季報は、林業試験場が設立された 12 年後の 1969 年に創刊されました。創刊号の巻頭言には、当時の阿部豊場長と職員の以下のような決意が述べられています。「この種の刊行物を定期的に発行するには、部内体制の不備について、いささか危惧を感じずるものであるが、やらなければならないことはやるべきである。との職員一同の意思を尊重して、刊行にふみきった次第である。」

確かに創刊当時、北海道の林業技術は発展途上であり、現在よりも少ない職員数で年 4 回の紙面を充実させ、継続させることに不安があったのは事実でしょう。こうした創刊時の決意を 52 年間 200 号まで、職員 1 人 1 人の努力と創意工夫でつなげたことを、非常に感慨深く思うと同時に、長年にわたる読者の皆様のご支援に厚く感謝申し上げます。

創刊時の 1960 年代は、高度経済成長時の旺盛な木材需要に支えられ林業は最盛期を迎え、現在の約 2 倍の国産材が供給され、全国木材自給率は 7 割を超えていました。北海道でも豊富な天然林資源を背景に、現在の約 2.5 倍の森林が伐採され木材需要に応えるとともに、約 8 倍の植林が実施され人工林資源を営々と育ててきました。

創刊から 26 年後の 1995 年光珠内季報は、めでたく 100 号を発刊しました。一方で、木材の輸入自由化等により林業の衰退は著しく、2000 年に入ると木材自給率が初めて 20% を下回り、日本から林業は消滅するとさえ言われ、社会も政策も森林への期待は環境保全機能へと大きく傾斜しました。これらの状況を受けて、光珠内季報 100 号では「林業と環境保全の両立を目指して」を特集しています。

そして、200 号発刊を迎えた 2021 年は、いろいろな意味で特別な年になっています。進行する地球温暖化は、世界共通の危機と認識され、日本でも豪雨や台風による災害が頻発するようになりました。これらの気候変動対策として、日本など世界の主要国が 2050 年の実質的な CO₂ 排出量ゼロを目指した「カーボンニュートラルの実現」を表明しています。森林分野においても、森林吸収源や都市の木質化などについて、様々な政策が展開されようとしています。

さらに、現在は新型コロナウイルスによる世界的パンデミックにより、経済活動や社会生活に甚大な影響が生じています。木材分野においては、米国等による感染症対策と巨額の景気対策とが相まって、郊外への住宅建築への投資意欲が向上し、「ウッドショック」といわれる木材不足、価格高騰が起きています。こうした事態を受けて、国産材・道産材の安定供給の機運が高まり、収穫期を迎えた人工林の利用に、カーボンニュートラルな社会の実現と合わせて大きなチャンスが訪れています。

このように、光珠内季報の創刊から 52 年間に森林・林業・木材産業を取り巻く状況は激変してきました。激変した社会を「光珠内季報の歴史」から俯瞰し次世代につなげるという意味で、200 号では様々な分野の研究の取組や光珠内季報ならではのユニークな記事について、3 名の林業試験場 OB と 1 名のベテラン職員に執筆してもらいました。光珠内季報は 172 号から電子版となっており、情報発信のデジタル化はコロナ禍で今後さらに加速するでしょう。2050 年には、カーボンニュートラルな社会の実現において、森林・林業・木材産業が大きく貢献していることを期待すると同時に、職員の創意工夫で光珠内季報 300 号発刊を達成し、未来型光珠内季報へと進化していることを楽しみにしています。

今後も光珠内季報は、研究成果をわかりやすく伝えるという編集方針は一貫し、北海道の林業技術向上に寄与していきたいと思っておりますので、引き続きご支援よろしくお願いたします。

(森林研究本部 本部長)